

記号論と意味論

磯 谷 孝

1

R. ヤコブソンは“On Linguistic Aspects of Translation”のなかで、「Signum がなければ signatum はない」⁽¹⁾と述べ、意味論が記号論にほかならないことを指摘している。意味は記号をはなれてそれ自体で存在することはできず、記号によってはじめて成形される。我々の意識はひとえに言語意識であり、世界の分節、事象の区別を言語に負っている。意識は内言 *внутренняя речь* によって支えられ、内言は外言 *внешняя речь* すなわち言語による社会的交流の過程で形作られる。外在化した記号的側面が表に出されて意味がかくられるが、内言では逆にそれが取り払われて意味がいわばむきだしに近くなる。聴覚映像を我々は意識しないことが多い。そこでは形態的側面は押し潰されて *signatum* の範列論、連合関係が強められ、推論ないし述態関係形成のために同義語群の共通概念が操作されるようになるが、それでも外言の支えを絶たれるわけではない。このように、意味の成形はあくまでも記号におぼさっているので、意味単位の設定は記号単位の設定規準に準じて行うことが考えられる。

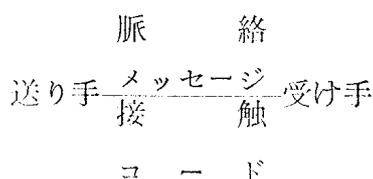
ヤコブソンによると、記号 *signum* は音と意味、*signans* と *signatum* の結合で、対象との関係性により様々に機能する。*Signans* は被知覚性 *Wahrnehmbarkeit*, *signatum* は翻訳可能性 *Übersetzbarkeit* を特徴とする。記号の翻訳可能性については記号論の祖パースやイエラムスレウがつとに指摘しているし、ロシアではウォロシノフが、了解とは記号による記号の置き換え⁽²⁾という考えによってそれを示唆している。ここでいう翻訳とはどんなものなのか。「しかし、単に *signans* ばかりでなく *signatum* も純言語学的、しかも完全に客観的な方法で研究できる。我々は、もし、各言語記号の本質的特性は同一の言語体系あるいは他の言語体系の、より展開され、より明示化された記号あるいは簡略な記号に翻訳できる点にあるというパースの命題を認めるなら、純言語学的な意味論を構築することができるだろうし、またそうしなければならない。」⁽³⁾ パースのいう翻訳はいわゆる翻訳、つまり、Aという自然言語からBという自然言語への翻訳よりも広義であることが注目される。記号は有限でありな

がら現実のすべてを名指すのであるが、それが可能なのは、一つには *signans* と *signatum* の結合が不縁的、習得的だからであり、さらに、記号と物とは一対一の対応をなさず、前者は個と普遍、種と類を表現するという融通性をそなえているからである。そのため記号は体系内部で有機的関係をなし、どんな新しい状況をも有限である自己の要素をたくみに組み合わせて表現してしまう。弁別的特徴、音素、語は有限で閉じた体系であるが、語はその組み合わせにより無限の文を生成し、これにより無限の世界と対応し、同定を行う。この無限の文が理解可能なのは別の分りやすい明証的な文で置きかえ可能だからである。記号体系の有機性とは「記号への記号の関係づけ」の可能性であり、その同定能力が了解とか認識、思考にほかならない。ヤコブソンはパースを踏まえて翻訳を、1) 同一言語内の翻訳 (= 言換え。ある記号を同一言語の別の記号で説明すること)、2) 言語間の翻訳 (本来の翻訳)、3) 記号間の翻訳 (言語記号を非言語記号で置き換えるか、その逆) の三つに解釈したが、⁽⁴⁾ このように翻訳を拡大解釈すると、それはあらゆるコミュニケーションの原理にほかならなくなる。

我々は記号という概念を中心に論を進めてきたが、記号は 1) 体系性、2) コミュニケーション機能を特徴とする。体系性についてはソシュールがラング論のなかで明らかにしたが、伝達の機能は完全に無視されてしまった。コミュニケーションの問題は、とりわけ情報論の枠のなかで取りあげられて実りゆたかな成果をもたらされた。情報論の祖 C. シャノンはコミュニケーションにおける意味を「翻訳という可逆的操作の際の不変体」と定義した。彼自身は「通信の主要課題は、あるところで伝達のために選ばれたメッセージを別のところで正確にあるいは近似的に再現することにある。しばしばメッセージは意味をもつ。この、コミュニケーションの意味論的側面は問題の技術的側面に関係はない」⁽⁵⁾ としたが、この定義は情報論を踏まえる記号論研究に取り入れられるようになった。ロシアの Вяч. Вс. イワーノフ, A.M. ピャチゴルスキー, A. A. ピオトロフスキー, И. М. ヤグロム, A. М. ヤグロム, Ю. М. ロトマン, Б. А. ウスペンスキーをはじめ、フランスの A. J. グレマス (*Sémantique structural, Recherche de méthode, 1966*) や C. ブルモンがそれである。周知のとおり、ヤコブソンは戦後、通信理論、情報論に大きな関心を示し、それら諸科学の用語で言語学を読みかえる試みを行ったが、実はパースの記号論、シャノンの情報論以前にフッセルの表現論、ウォローシノフのメタ言語論から示唆を受け、展望を切り開いていたのである。フッセルは表現⁽⁶⁾を話し手と聞き手の間での記号の交流とし、記号は伝達機能を主とするもので、交流に際してはこれに告

知機能が加わると考えた。記号の物理的側面(音声複合)は意味付与作用によって意味あるものとなり、この空虚な意味は対象と関係づけられて充実させられる(意味充実作用)。フッセルは論理学を厳密に基礎づけるために対象関係性を取り除いたスペーチェスの意味のみを取りあげるべきだとし、意味の組成については、「《意味》とは何かということは、色や音とは何かということが我々に与えられているのと同様、直接的に我々に与えられているであろう。それはもうそれ以上定義されず、記述的に最後のものである」⁽⁷⁾とみなした。ヤコブソンはフッセルの表現論から話し手、聞き手の区別の重要性を読みとり、それを『芸術的リアリズムについて』(1921)のなかで取りあげ、対象関係による日常的言語、詩的言語の区別は『最新ロシア詩』、『パステルナーク論』で展開した。またフッセルの意味の同一性の概念はシャノンの「翻訳という可逆的操作の際の不変体」という概念を受け入れる素地を作り、先にあげたウォローシノフの、了解とは記号の関係づけという考えはヤコブソンがコード変換 *перекодировка*; *recording* からメタ言語論⁽⁸⁾を発展させることを可能にしている。

ヤコブソンはシャノンの通信系モデルを図のように組みかえ、⁽⁹⁾



そこから様々な新しい事実を読み取っている。話し手と聞き手はメッセージへのアプローチを異にし、前者は観念から音へとむかうが、聞き手は音を捕え、それを解読し、観念を把握しようとする。話し手は表現の選択可能性(状況記述の選択と同義的表現手段の選択)をもつが、聞き手は記号を連辞論的に受けとめメッセージを再構成していくので、選択の可能性がなく、同音異義の曖昧さを背負わされている。ここで意味論にとって重要なのはコードの概念である。話し手は自分のコードでメッセージを組み立てて発信、聞き手も自分のコード(いわば暗号解読表)をつきあわせてメッセージを「解読」する。それは自分のコードでメッセージを再構成することでもある。たとえば、日本人同士の場合、同一の日本語で交流するから解読はふつう自動的に行われるが、だからといって両者のコードを完全に同一視してはいけない。我々は信条、世代、環境を異にする人について相手のことばが分からないといい、ロシア語では、うまが合うことを *найти общий язык* という。このことはたとえ同一の自然言語であろうと、我々それぞれが内容的に異ったコードを持つことを示している。

この点こそ、意味の可変性を理解するための第一歩となる。多義語の例から分るとおり記号の数よりも意味の数のほうがはるかに多い。結合による意味生成、上記の語用論的ヴァリエーションは意味をいっそう変幻自在なもの、多様なものにしてしまう。了解とはそうした差異のなかの同一性確認のことであり、確認された同一性が意味にほかならない。ヤコブソンのコード論はソシュールのラング論の不備を明らかにする。「言語は体系の体系で、様々な個別的コードを含む総体的コードである。言語の文体は偶然的、機械的集積ではなく、個別コードの合法的ヒエラルキーを形成する。」⁽⁴⁰⁾ 等質的な単一の体系というソシュールのラングは、コミュニケーションの立場からみると、はなはだしい単純化であるし、したがって共時態、通時態の区別も批判の対象となる。ソシュールは伝達から出発しなかったためパロールの意義を十分に理解しえず、社会的規約としてのラングという仮構を最重要視してしまった。

現在、フランスでは、メルロ・ポンティの「パロールの現象学」、デリダのグラモトロジー、ポール・リクールの解釈学などでこのラング論の批判がなされているが、ロシアではフォルマリストがフッセルの表現論を踏まえたためにラング論に毒されないですんだ。トゥィニャーノフ、ヤコブソンの『文学および言語研究の諸問題』(1928)、ウォローシノフの『マルクス主義と言語哲学』(1929)でもラング論の批判がなされている。後者はヨーロッパにおける諸研究の批判検討にもとづいてすぐれた話法論を展開し、のちに『ドストエフスキの創作の諸問題』(1929)でそれを実践的に解明し、さらにヤコブソンの『動詞範疇としての転換子とロシア語動詞』⁽⁴¹⁾を生み出すきっかけになった。表現面の同一性とそこにひそむ内容の可変性については早くから語彙論でも論じられていたが、パロールの研究の過程で有効な結論を引き出したのは、フェージュも指摘したとおり、フォルマリストたちである。彼らは、初め、「手法」の概念にもとづき表現面でのアイデンティティーを追求したが、のちにトゥィニャーノフは手法を形式と機能に分け、形式が同一でもその機能は変化することを指摘した。⁽⁴²⁾ この「発展」論は系列論と密接な関係をもち、形式主義克服の展望を開いたのである。

人によってコードが異なるなら、コードは無限に存在することになるが、それらはなんらかのタイプ、文体というかたちで分類できよう。地域、階級、時代、文化(科学と芸術、宗教 etc.)にもとづく区別が可能だが、ここではまず認識論的目的という見地から検討しておこう。

我々の意識は言語意識であり、それは日常的言語を支えとしている (cf. ウ

オロシノフの *жизненное общение*)。「生活」そのものが複雑な現象であるために、日常言語は雑駁をきわめ、様々な体系のるつぼとなっている。生命活動、心理、文化に関する言語がそこで入り乱れて存在する。だが日常言語は常識性と目先の有用性によって機能するために大雑把すぎ、正確な認識を行なううえで不適當であり、学問的記述のための言語が必要になる。この場合人工言語を作ることもあるが、それとても究極的には自然言語によって定義される。日常言語の不正確さを排するため「修正と再定義」は、ある語の意味内容について別の語による一義的説明がなされることであり、その説明は言語についての言語¹⁴⁾であるからメタ言語である。メタ言語操作は我々の認識作用や了解に深いかかわりをもっている。対象言語である日常言語の意味内容とメタ言語の意味内容は、同一の表現面をもっている、意味成分の出し入れが行われていて別の次元に属する。科学のメタ言語は認識目的によって規定される特定視点への関与性にもとづいて定義され、内容が **explicit** な明示言語である（ただし、哲学の視点は生についての観念という主体的色どりがなされており、別のメタ言語といえる）。したがってメタ言語ではそこに含まれる体系が限定される。*ЖИЗНЬ* という語は、同一の表現面でありながら、日常生活的定義、生物学的定義、哲学的、社会的定義によってそれぞれ意味内容を異にする。文学の言語は哲学と同様に生の観念を伝えるが、それを概念で **explicit** に記述せず、形象をもち、生そのものの描写（とその方法の選択）によってそれを展開していくから、この観念は含意として表わされる。この場合、芸術的知覚史が関係し、芸術的知覚を喚起する構造が作りだされなければならない。構造は有限の枠のなかに無限の世界を反映させるようにテキストに密度をもたらず。記号の意味内容は、なによりもこの構造によって規定される。たとえば、エセーニンの詩における「青」は独特の意味をもち、その特性は彼の創作構造のなかで決定されよう。

2

通信コードと異って言語コードは諸レベルの複雑な階層構造からなり、その諸要素が意味を持ちうる。意味への関与性の低い順に挙げると、弁別的特徴、その束からなる音素、音素の連続からなる形態素があり、形態素は語を、語は文を形成する。レベル内で単位が分節され、下位レベルの諸単位は上位レベルへ統合されて意味を担う。¹⁴⁾ 音素は意味を区別しても、意味そのものは担わないので、形態素が最小意味単位をもつといえよう。なんらかの意味単位の設定

は意味論の客観性のために必要な作業仮設である。ここでは語の意味を「意義」лексема, 形態素の意味を「意義素」семема (両方を Значение といってもよい), 意義(素)と意義(素)を区別する特徴を「意義弁別的特徴」смыслоразличительный признак, また文の意味を「意味」смысл と呼ぶ。Дом は語で一つの形態素からなる。Дом-ик は二つの形態素からなる。意義素には語彙論的意義素と文法的意義素の区別が必要だが、同時に相互代替性にも留意しなければならない。語義はその成分, 徴候の出し入れが可能だが、文法的意義素は拘束的である。Дом-ик 「小さい家」は語幹 дом- (家) と接尾辞 -ик (小さい) からなり, 男・単・主, 対という文法的意義素をもつ。Дом-ишко も同様に分析できるが, -ик と -ишко は「卑小さ」の有無という弁別的特徴によって区別される。ただし, 語義が文中に置かれて決定され, 文は世界に対して「開かれて」存在するので, 閉じた世界をなす音素のように弁別的特徴のリストを抽出しつくすことは不可能で, なんらかのカテゴリー部類内部でそれがなされる(対立, 差異の限定が可能になるから)。語はその選択(文体論)と結合により様々な範列論的意味, 連辞論的意味を形成する。指示的意味, 内包的意味, 比喩等の問題もここにかかわりをもつ。

語自体は抽象的単位にすぎず, 文脈におかれてはじめて多義性から解放され, 一義化される。それに文の「意味」はしばしば単なる語義の総計以上のものとなるから, 意味は文の機能との関係においても追求されなければならない。¹⁰⁴ 文は単なる文法的命題としてではなく, 状況におかれた文, つまり言表 высказывание としても扱われるべきで, パロール, ことばの構造の形式化が必要になる。文のレベルは言語の階層構造の最上部にあり, 世界に対して「開かれて」存在する。¹⁰⁵ 言語は文においてはじめて「存在の住居」となり, 様々な徴候の出入りが生ずる。世界に対して開かれている文を取りあげるとき, 分析の便を計るために文を生成する主体と文に写し出される客体を区別する必要がある。主体は欲望を原動力として生命活動を行うが, この活動は状況に対する反応として表われ, 常に意図, 目的をともなう。言語を操る知的存在としての人間は環境との相互作用のうちに哲学, つまり, 生についての観念, 価値観を築きあげるが, それが意図と反応を決定する。環境はなによりも文化的形成物の枠づけをもつから主体の哲学もそれに規定されることになる。

このように閉ざされた体系としての言語から開かれた体系としてのパロールの領域に入ると様々な新しい要因が加わってくることが分る。ソシュール以来, 言語学の研究はラング中心に推し進められたが, パロールがすっかり無視され

たというわけではない。リチャーズの伝達機能（指示機能，喚情機能）研究，ガードナーの speech 研究，フッセルの表現論，フォルマリストの詩的言語研究，ウォーシノフによるパロール体系化の試み，ビューラーのオルガノン・モデル，ヴィゴツキー，スキナー等，心理学者による「ことば」の研究，最近のコミュニケーション論などがそれだが，ヤコブソンの speech event の機能図式⁴⁴はその中でももっとも完成されたもので，その特色は詩的機能とメタ言語機能が組み入れられていることである。詩的機能は詩のことばという文化現象を明らかにするとともに，日常言語の本質をもいっそう明らかにし，メタ言語は言語と思考，認識の関係を明らかにするものである。この両機能を取りのぞくと，これまでの諸家の見解とそれほど差がなくなる。指示，情動，意志，交流機能のうち，指示機能は概念的，対象・論理的意味を実現し，ことばの支配的な機能をなす。他の三機能は追加的な意味を実現するが，感歎詞 (Ox!)，挨拶 (Доброе утро!)，掛け声 (Давай!) 等にかなり純粋な形で現われる。これらは欲求と言語の境目にあり，概念的意味をもった言語で言いかえることができるから，これら叙想的意味は追加的なものとみなして概念的意味を主に取りあげることになろう。両者を合わせて意味作用としてもよい。

翻訳論のコミッサロフは機能図式論を意味階層論⁴⁵に読みかえている。すなわち，1) コミュニケーションの目的のレベル，2) 状況描写のレベル，3) 通報レベル（文が状況のなかに置かれた場合），4) 言表レベル（状況を捨象した文そのもの），5) 言語記号のレベルを設定し，各レベルを通じて最大限の等価性 эквивалентность を確保することが翻訳（了解）にとってもっとも理想的だが，いつもそうはいかないから，最小不可欠の等価性は目的レベルの等価性で，上位レベルの等価性を前提にそれが下位レベルの等価性に支持されればされるほどよい。これは，意味は記号あつての存在であるとともに，意味は記号より多様で可変的であること，その多様性が言語記号の階層性と深いかかわりをもち，言語外要因ともつながることを示している。了解は5レベルにまたがりうる。1) 何も分からない，何やら難しい言葉である（全レベルでの了解不成立），2) 単語は分るが，意味がとれない（言語記号レベルでの了解）3) いくら聞いても，何についての話が分からない（言表レベルでの了解）。4) 「波動の干渉」について話しているが，それがどういうものか分からない（通報レベルでの了解）。5) 未知の人々について話しているが，彼がなぜそうするのか，何を言おうとしているのか（状況描写レベルでの理解，コミュニケーションの目的のレベルでの了解不成立）。語られた内容を覚えていてもその表現を忘れてい

ることがよくあるが、それは形式派の用語でいえば「全一的意味」のために「名辞的意味」が透明化したからである。このように意味にもなんらかの階層を認めることによって「空虚な意味」の充実を実現する対象関係性の構造化を押し進めることが可能になる。それは主体ばかりでなく客体という要因の解明によって完成されよう。

ナポレオン、イエナの勝者、ウォーターローの敗者は、それだけでは空虚な意義にすぎない。歴史によると、ナポレオンはイエナで勝ち、ウォーターローで敗れたことになっており、これからイエナの勝者、ウォーターローの敗者という異ったスペーチェス的意味が充実されて同一人物を指示することになる。対象関係性は多分に偶因的である。対象関係性によって同定される例をあげてみると、比喩という類似による同定もそれである。日本人は月を盆にたとえ、レールモンツフはそれを丸いチーズに例えた。個人の連想はいく通りにでも回転するだろう。自然的徴候「黒雲だ!」は「嵐がくる!」を意味するが、嵐の自然的徴候はほかにもあろう。同じく、「西の空が明るくなった」、「雀が一斉に鳴きだした」は「天気ははれる」と同義となりうる。諺「糠に針」、「のれんに腕押し」、「豆腐に鋌」は背後に同じ意味をもつ。「鳥の将に死なんとする、その鳴くや哀し。人の将に死なんとする、その言やよし」は比喩と本意とが対句でまとめられたもの。表現とその奥にひそむ本意 тема,⁽⁹⁾ тематический смысл の関係はちょうど文の意味 [единоцелостный] смысл を形成するために意義 значение が透明化するのと同じことではないか。形式派は意義と意味を区別したが、本意と意味の区別も行う必要がある。それは предложение と высказывание の区別にほぼ対応させてもよい。文字通りの意味のとき、 $C=T$ 、本意が言外にでてくる比喩は $C<T$ 、文字通りの意味と本意の両方にかけるととき $C:T$ 、文字通りの意味が複数の本意をもつとき $C<T^{1/2}$ etc などの関係が考えられよう。この場合、話し手は確実に一つの本意を所有している点で聞き手と異なる。両者の違いは本意の生成と追求の違いにある。

対象関係が偶因的性格をともなうことは先に述べたが、それは意味と本意の流動的關係を意味する。西の空が晴れると晴天というのは、西高東低の気象の地域についてのみ当てはまるだろうし、日本人は4を忌み、西洋人は13を忌む。だが偶因的といってもそこにはなんらかのパターンが存在することを見逃してはいけない。それは広い意味での文化のタイプに規定されているのである。源氏物語にでてくる「哀れ」と現代語としての「哀れ」はすっかり意味内容を変えており、それを正しく理解するためには時代、文化の体系の相違を考慮に入

れなければならない。西鶴や近松の「義理」も現代における義理とは社会的評価が異なるであろう。それらを正しく了解するためには「翻訳」が行われなければならないのである。この場合の翻訳は紫式部のコードから現代の特定読者のコードへの翻訳，コード変換であるよりも，まず第一にある時代のコードから別の時代のコード，ある文化のタイプから別の文化のタイプへの翻訳であり，個人的な特性はそれら一定タイプのなかに位置づけられて確認される。それはタイポロジー的連関ないしは階層構造化によってとらえられよう。シンボリズムの言語（コード）はブロックの言語のメタ言語であり，инвариантであるが，ブロックの言語はその вариант となり，これは彼の詩《Двенадцать》の言語に対しては инвариант となり，《Двенадцать》がその вариант となる。このように語の意義は文の中で決定されるとともに，さらに時代，文化の相違による諸言語階層構造のなかに位置づけられること（諸コード間の翻訳）によって正しく把握されるのである。いわば言語は諸言語の階層構造の中に位置づけられており，この諸言語の階層構造には文化の諸タイプの階層構造が対応して存在しているといえる。両者の関係は相関的で，文化の構造が記号を規定するとともに，記号が文化を支えていくのである。こうした諸言語のタイポロジー的連関ないし階層性の考えをフォルマリストたちはボドウェン・ヂェニクルテネの方言研究から取り入れ，とりわけトッィニヤーフが系列（ряд）論，発展（эволюция）論として体系化した。残念ながらそれはフォルマリズム運動のなかでは十分に展開されなかったが，現在，ロトマンをはじめとするタリンの記号論研究者たちによって発展させられつつある。²⁰

以上，意味論が実は記号論にほかならないことを明らかにしながら，значение, смысл, тематический смысл といった意味の諸相の本質を粗描してみた。Значение については現在，音素論あるいはヤコブソンの格研究に範をおく成分分析，場の理論，構造意味論を中心にして инвариант の追求がなされているし，смысл, тематический см. については，コミュニケーション論の諸概念にもとづいて研究がなされている。コード変換，「翻訳」という概念を発展させた諸コード階層構造論もその一つである。Значение は言語の枠に閉ざされるといっても，言語そのものがすでに特定の世界の絵図を反映している以上（サピア・ウォーフの仮説），内部から смысл, тем.-см. の実現を規定することが考えられるし，смысл, тем.-см. はその実現の様々なヴァリエーションによっていつか значение の意味成分を変えることになるのである。こういっわけで両者は常に相関関係のなかでとらえられ分析されなければならない。

- 注(1) R. Jakobson, *On Linguistic Aspects of Translation, Selected Writings, II.* p. 260.
- (2) В. Н. Волошинов, *Марксизм и философия языка*, стр. 18. 「記号の了解とは、了解の対象である所与の記号を他の、すでに知っている諸記号に関係づけることである。いいかえると、了解は記号に答えるのに記号そのものをもってする。記号から記号、新しい記号へと進む、イデオロギー的創造物と了解のこの連鎖は不可分かつ不断である。ある記号的、したがって、物質的環から我々は別の、同様に記号的環へと不断に移っていく。」なお、Вяч. Вс. Ивонинによつて、本書は事実上、バフチンによつて書かれたものであるという。cf. Вяч. Вс. Иванов, *Значение идей М. М. Бахтина о знаке, высказывании и диалоге для современной семиотики, Труды по знаковым системам VI*, стр. 44, Тарту 1973.
- (3) R. Jakobson, *Zeichen und System der Sprache, Sign Language Culture I* pp. 274, 275. なお、ヤコブソン前掲書 p. 261 ならびに *Linguistics and Communication Theory, SW II*, を参照のこと。
- (4) *On Linguistic Aspects* p. 261.
- (5) К. Шеннон, *Математическая теория связи*, М., 1963, стр. 243.
- (6) エドモンド・フッサール『論理学研究』2, 43頁, みすず書房。
- (7) 同201頁。
- (8) *On Linguistic*.....p. 262.
- (9) R. Jakobson, *Linguistics and Poetics, Style in Language* p. 353.
- (10) *Zeichen und System der Sprache* s. 275.
- (11) *Shifters, Verbal Categories and the Russian Verb*.
- (12) Б. М. Эйхенбаум, Ю. Н. Тынянов, *Русская проза*, стр. 10. 「文学的発展の諸法則とは、機能と形式の交代の諸法則である。」
- (13) cf. *On Linguistic Aspects of Translation; Linguistics and Communication Theory; A. J. Greimas, Sémantique structurale, Larousse* p. 69—104.
- (14) レベルについては Э. Бенвенист, *Уровни лингвистического анализа, Новое в лингвистике IV* стр. 434—449 参照のこと。バンヴェニストは形態と意味を次のように定義している。「言語的単位の**形態**とは、この単位が下位レベルの構成要素に分解できる能力と定義できる。言語的単位の**意味**とはこの単位が上位レベルの成分となりうる能力と定義できる。」
- (15) В. А. Звегинцевは**значение** と**смысл** を次のように区別す。
「значение は言語の中にあり, смысл は言語の外にある。」(Значение и смысл в деятельности общения, *Язык и лингвистическая теория* стр. 176) 「言語学的 значение は……交流活動から独立し, 言語の境界内に閉ざされているので, 必ず言語によつて変るものである。」(同上 p. 175) Звегинцевはソシュールの価値の概念で значение を説明しようとした。「純言語的分野においては語の значение は, その語と他の諸単語との潜在的に可能な結合法によつて決定される。これらの結合法がいわゆる語の価値を形作っている。語のもつこれらの可能な結合

法の総和こそ、客観的に存在する現象あるいは言語体系の事実としての語義の存在を成り立たせるものである。」

- (16) 注(14)の p. 447 「文とは不定の、無限に変容する言語の生命そのものである。文とともに我々は記号の体系としての言語の領域を去って別の世界、交流手段としての言語の世界に入り込む。この交流の表現がことばにほかならない。」
- (17) R. Jakobson, *Poetics and Linguistics, Style in Language.*
- (18) В. Н. Комиссаров, Слово о переводе, стр. 64—66.
- (19) Темаなる用語は Волошинов の前掲書第四章 тема и значение в языке からとった。
- (20) とりわけ Ю. М. Лотман, Структура художественного текста; Статьи по типологии культуры. Материалы к курсу теории литературы, вып. 1, Тарту, 1970.